



大会カレンダー

2023年度春季大会

2023年5月27日(土)、28日(日)

慶應義塾大学(神奈川県横浜市)

大会案内は4月上旬発送予定です。

2023年度秋季大会

2023年10月28日(土)、29日(日)

九州大学(福岡県福岡市)

2024年度春季大会

明治大学(東京都千代田区)

2023年度学会奨励賞

Soichiro Jittani, «Zola contre Edmond About. Le vitalisme à l'œuvre dans *Thérèse Raquin*» (*Revue d'Histoire littéraire de la France*, 121^e année, n° 4, 4 – 2021, p.827-847)

太田晋介「ポンジュ詩学の虚軸としてのポーランとシュルレアリスム——比喩・イメージの主題を中心に——」(『ステラ』、第40号、2021年、p.155-176)

なお本賞の授与式は2023年度春季大会にて行います。

2022年度秋季大会

幹事長 谷口 亜沙子

10月22日(土)、23日(日)の両日にわたり、大阪大学を開催校とし、2022年度秋季大会が開催された。初日は豊中キャンパス、二日目は箕面キャンパス、という二会場での開催に加え、新型コロナウイルスの感染状況を睨みつつオンライン開催の準備も必要だった、という通常よりもはるかにご負担の大きい条件のなかで、対面での大会開催を見事に成功させていただいた大阪大学の先生方ならびにスタッフの皆様に、常任幹事会を代表して心より御礼を申し上げます。

以下、時系列順に大会の流れを報告したい。

大会第1日目、大阪大学の林千宏先生の司会で行われた開会式では、大会実行委員長の山上浩嗣先生より開会の辞が述べられた。大阪大学での大会は1965年、1998年に続いて3回目の開催となるが、文学研究科と言語文化研究科が人文学研究科に統合してからは初の開催であり、大会準備を通して交流が深まったこと等が述べられた。そして、二日間同じ会場を取ることはできなかったものの、昭和の趣の残る緑あふれる豊中キャンパスと、2021年に完成したばかりの革新的な箕面キャンパスをそれぞれに楽しんでいただきたい、という言葉によって大会は幕を開けた。

続いて、開催校を代表して、大阪大学人文学研究科長の宮本陽一先生からのご挨拶が述べられた。新しい総合知の創出にあたっては、描画AIのような先端科学技術だけでなく、人間的な情動こそが必要なのではないかという問いかけがなされた。小倉孝誠会長による会長挨拶では、副会長でもあり大会実行委員長でもある山上浩嗣先生を始めとする大会主催校の先生方や常任幹事会や事務局への謝辞が述べられ、また、二日目の総会では分科会と査読制度をめぐる重要な提案がなされるので、ぜひ多くの人に出席してほしいという呼びかけがあった。

午後からは2部に分かれた研究発表会が行われた。分科会の構成は、「語学/表象」が1つ、「17世紀/19世紀」が1つ、「19世紀」が1つ、「20-21世紀」が3つの合計6つとなった。詳細については各分科会の司会者報告をご覧ください。

続いて、アトランタのジョージア州立大学教授エリック・ル・カルヴェズ氏の特別講演«*Génétique de Mme Arnoux dans L'Éducation sentimentale*»が開催された。司会の大鐘敦子先生の背景説明によると、2015年12月のPierre Bergéオークションで58万ユーロで落札された幻の「セナリオ デュボワ *Scénario Dubois*」の画像と一部の未公開「全体シナリオ」が個人コレクターの許可によって、本大会限定で映写可となった。その大部分が世界初公開である。このシナリオの発見により、従来「作業手帳 *Carnet 19*」から始まるとされていた『感情教育』の分類整理は「セナリオ デュボワ」から始まるばかりか、アルヌー夫人の人物像の源泉がいわゆる『初稿感情教育』や自伝系初期作品『狂人の手記』にまで遡ることが立証された。続くル・カルヴェズ氏の発表では、70枚ほどの草稿や画像がスクリーンに投射され、稿を追うにしたがって、アルヌー夫人の人物像にどのような変化があったのかの詳細に提示された。「デュボワ」夫人から「モロー」夫人へ、「アルヌー」夫人を経て「アルヌー夫人」に決まるまでの名前の変遷だけでなく、フレデリックへの応答の仕方、とりわけ、老いの兆しによってフレデリックに衝撃を与える終盤の着想がどのように胚胎されたのか等、フローベールが逡巡に逡巡を重ねてひとつの小説世界を作り上げていったことが実感される貴重な講演であった。質疑応答においても、草稿の年代判定に関する金崎春幸先生の質問に始まり、外生的生成過程と内生的生成過程をいかに考えるべきかという松澤和宏先生の問いかけが続き、さらに武末祐子先生による名前の音韻変化に着目した興味深い質問に会場が沸くなど、高度で専門的な草稿研究の奥深さやその可能性を垣間見ることのできた意義深い講演会であった。

初日の締めくくりで開催された「歓談会」についても、ぜひ特筆しておきたい。感染予防のために、「懇親会」のような飲食物は用意されないが、歓談のための広い空間が提供される、というコンセプトで、分科会発表を終えた会員を含む多数の参加者が久しぶりの歓談を楽しんだ。開催校側では、飲食物がないために、会場が閑散とすることも心配なさっていたそうだが、こうした集いの喜びは、まず人であり、そして言葉であったのだということが

改めて実感されるような会であった。歓談会のスピーチにおいても、まず澤田直副会長が、生身の人間として雑談ができるということの貴重さなどについて触れられ、続くフランス大使館の大学交流官のエリー・キエレ氏も、出会いの機会が少なかった任期のなかで、フランス語フランス文学会を訪れることのできた喜びを語ってくださった。また、柏木隆雄名誉会員のスピーチでは、ご自身の経験を引かれながら、若い頃には直感を信じて研究を進めることが大切であることなどが語られた。感染予防をしながらも、なんとかして歓談の機会を設けようと画策してくださった大阪大学の皆様の心遣いには重ねて感謝申し上げたい。

大会2日目は、箕面キャンパスに会場を移し、午前3件、午後3件のワークショップが開催され、大変な盛況であった。以下の①から⑥までのワークショップの概要は、例年であれば、常任担当幹事による報告をまとめて掲載していたが、すでに複数の業務を抱える常任担当幹事の負担を軽減するために、今回はコーディネーターや発表者を務められた先生方ご自身にご報告をお願いした。ひと仕事終えたあとで、すぐさま原稿をお届けくださった先生方には、心よりお礼申し上げる。

①「プレザンス・アフリケーヌとは改めて何か」は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で2015年度から2020年度にかけて実施されたプレザンス・アフリケーヌ（以下PAと略記）の共同研究の成果に基づくワークショップである。星塾守之の司会進行のもと、中村隆之がPAとその研究をめぐる基本情報および雑誌PAで行なわれた「国民詩」（*poésie nationale*）論争を、佐久間寛がPAの創設者アリウン・ジョップ（Alioune Diop）を中心としたフランス領の脱植民地化に向けたPAの歩みとアフリカ諸国独立後のその錯綜について紹介するとともに、PA研究をめぐる報告者間での対話が交わされた。会場には30人を優に超える会員が参加し、PA研究に携わった方からのコメントをふくめ、終了時刻を超過するほど、たいへん活発な質疑が交わされた。その多くは政治と文化をめぐるものであり、脱植民地化期の政治的争点であるアルジェリア戦争、またはイスラエル問題に対するPAの立場や、PAにとっての「革命」の意味などが問われた。実際、政治の問いが前景化する点にPAの特徴がある以上、こうした問いを誘発した本ワークショップは報告者にとっても大変意義深いものだった。

（報告者：中村）

②「サント＝ブーヴィアーナ：作家研究からサント＝ブーヴ像を再構築する」コーディネーター：池田潤

「近代批評の祖」として文学史の記述に必ず登場し、誰もがその重要性を認識している存在であるサント＝ブーヴ。それにもかかわらず、現在その著作は日本の書店から姿を消しており、フランスでもよく読まれているとは言いがたい。だが、ワークショップ会場は、ディスタンスをとって椅子ひとつずつあけて満席で（教室の定員数から推定するに参加者は50人前後）、この批評家への高い関心がうかがえた。

池田潤は、近年のサント＝ブーヴをめぐる動向を報告しつつ、さらにはサント＝ブーヴを読書界に回帰させることの意義を論じた。片岡大右は、フランス・ロマン主義におけるサント＝ブーヴの位置付けを明らかにし、より具体的にシャトブリアンとの関係について解説をくわえた。鈴木和彦は、詩人としてのサント＝ブーヴの特性を「メジャーな」ロマン派詩人との対比において浮かび上がらせた。松村博史は、「サント＝ブーヴに反論する」のバルザック論を再検討する形でサント＝ブーヴのバルザック評をどう評価するべきかを論じた。

会場からの質疑は活発でかつ多岐にわたった。サント＝ブーヴについては、新訳など基礎的なところからあらためて整備がなされてもよいのではないだろうか。（報告者：池田）

③ « Enseigner (par) la littérature dans les cours de français à l'université »: 「大学のフランス語の授業で、文学を（用いて）教える」は2021年の秋季大会に引き続き、同じテーマで行われたワークショップであるが、今回はエリック・アヴォカ（大阪大学）を中心に4つの発表がなされた。その目的は、文学を専門とする学生に限らず、学部生を対象にしたフランス語の授業で、文学を扱うことによってもたらされる多くのメリットを明らかにすることである。登壇者たちは、フランス文学や文化・社会を深く理解する為に、どのように文学を扱い、また教えればよいのかについて検討した。まず、深井陽介（東北大学）が、「第1回ゴンクール賞日本」の活動を紹介し、文理を問わず、学部生であっても、グループワークを通して豊かな読書会が実現できることを示した。次にジュスティヌ・ルフロック（京都大学）が、どのような教育方法を用いれば、学生が文学作品を読むことの楽しさを知ってくれるのか、現在のフランスの教育事例を紹介しながら詳細に論じた。第3に、マリ＝ノエル・ボーヴィウ（明治学院大学）がおとぎ話を用いた具体的な文学の教育方法を紹介し、学生の既知の知識をいかに活用すれば文学に興味を持つようになるかを考察した。最後に、エリック・アヴォカが絵画、イラスト、写真などの画像を用いたフランス語教育法を紹介し、イメージに写り込んだものを細かく描写することが、微細な文学テキスト分析に繋がっていくことを指摘した。日曜の午前中であったにもかかわらず、20名を超える日本人・フランス人の参加者があり、終了時間を超えても非常に活発な議論がなされた。非常に刺激的で有意義なワークショップだった。（報告者：深井）

④ « La littérature et le féminicide »: フェミサイドとは20世紀後半に使われ始めた言葉であるが、行為自体は新しいものではない。村田京子が示したように19世紀、主に男性作家が描いた女性の殺害には、女性への恐怖と支配欲が表れている。真野倫平によればフェミサイドはグラン＝ギニョル劇のお気に入りのテーマであったが、その美化に対抗しようとする作品もあった。またマルク・レンヌヴィルが紹介したように、世紀末のアルジェリアで起きたシャンビージュ事件は、心中を装った激情犯罪であると言われていた。梅澤礼によれば20世紀にはその激情犯罪についての研究が進み、原因が被害女性ではなく、加害男性と、男性たちが作り上げてきた社会にあると（ようやく）指摘されるようになった。

レンヌヴィルが日本語で挨拶したことであって、会場は終始和やかな雰囲気にも包まれた。パネリストの発表に続く15分間の質疑応答では、この新語の持つ意味や影響力、さらにはかつての刑法324条について質問が上がり、文学と歴史の観点から楽しく活発な議論が交わされた。

現在フェミサイドについては、世界中で支援や法改正が求められている。そうしたなか、この問題が深く社会に根づいていること、そしてさまざまな観点から研究されるべきであることを示すことで、フェミサイドの理解と予防に貢献することを願い、本ワークショップは幕を閉じた。（報告者：梅澤）

⑤ 坂本千代（神戸大学名誉教授）・倉方健作（九州大学）・鎌田隆行（信州大学、コーディネーター）によるワークショップ「作家事典のダイナミズム」には27人の会員が出席した。本ワークショップは、フランスの学術出版界において近年、精力的に刊行が行われている作家事典のポテンシャルに注目し、作家に関する事項を整理・集積する役割を担う事典が、未着手あるいは発展の余地のある研究テーマ・素材を可視化する創造性をも持ち、新たな研究活動に向けて開かれたツールであることを論じるもので、フランスで編纂された作家事典に分担執筆者として参加した三名のパネリスト——シャンピオンの『ジョルジュ・サンド事典』（2015）に参加した坂本、ガルニエの『バルザック事典』（2021）に参加し

た鎌田、ガルニエの『ヴェルレーヌ事典』(近刊)に参加した倉方——がこれについてプレゼンを行う主旨である。コーディネーターの概要説明の後、3件のプレゼンが行われ、具体的な編纂プロセス、項目の執筆を通じて得られた知見、今後の課題について各々の観点から報告が行われた。会場からは、情報更新が可能なウェブ版事典や複数の作家・作品を横断的に捉えるテーマ別の事典をめぐる示唆的な意見が挙げられ、文学事典全般のさらなる可能性を探る有益なワークショップとなった。(報告者：鎌田)

⑥ ワークショップ「シャルル・フーリエを読む」では、最初にコーディネーターの福島知己がフーリエの思想の要点を説明し、フーリエをユートピアとして読むことがその思想の特徴を明らかにするとともに、ユートピアという語の救出にもなることを述べた。次に大森晋輔はクロソウスキーのフーリエ論を取り上げ、この思想家がサドを現代社会の戯画とみなすのに対してフーリエにその乗り越えの可能性を見てとっていることを指摘した。クロソウスキーがおそらく『愛の新世界』から発想したのに対して、次の登壇者である森元庸介はむしろ『産業の新世界』に注目し、フーリエが情念のひとつに数えている密謀と産業(industrie、手管)との語源的関係を指摘した。最後に日本画家の中村恭子はみづからの作品をもとに創作の源泉としてのフーリエを論じた。フーリエの無限小概念の考察を皮切りに、南米チリの道端にたたずむ祠から九州の住宅街と共存する古墳までが縦横無尽に言及され、日本画の書き割りの画法が知覚世界の外部を意識させる「脱創造」であると結論される目眩く議論に会場は酔い痴れた。参加者数はおよそ50人前後で、最後は立ち見も出る盛況であった。(報告者：福島)

総会は、議長森本淳生先生の進行によって進められた。はじめに小倉会長より、2023年度学会奨励賞選考結果が発表された。受賞者は實谷総一郎氏と太田晋介氏のお二人で、授賞式は2023年度春季大会(慶應義塾大学)で行われる予定。受賞者にはお祝いを申しあげるとともに、今後のさらなるご活躍を期待したい。

また、来年度からは、候補者が希望すれば講評が本人に開示されること(審査員名は匿名)、ただし、審査員側が開示を希望しない場合には開示されないこと等が報告された。

総会については別掲の総会報告を参照されたい。

総会につづく閉会式では、まず小倉会長による挨拶があった。本大会でもワークショップが活況を呈し、聞けないジレンマを感じさせるほどであることや、直近のフランス文学関連の朗報として、アニー・エルノーのノーベル文学賞受賞の件に触れられ、以前アニー・エルノーで修士論文を書いた学生がいた際に、まとめてその作品を読んだ思い出などが語られた。学生との関わりによって教員の方が読書の幅を広げられるという体験は、この職業における最良の喜びのひとつだと思うが、そういえば、小倉会長は、初日の開会式挨拶でも「大会」のことを「教員も学ぶ場」と呼ばれていたのだった。

また、小倉会長は総会で議論された、分科会と査読のシステムがこれから大きく変わってゆく可能性についても改めて言及され、あらゆる組織と同じように、伝統の変革には大きなエネルギーを要するが、未来に向かって積極的に変わってゆくことに自分は賛成である、という趣旨の発言があった。また、そのためには執行部や幹事会のメンバーだけではなく、すべての会員の理解と協力が不可欠であるという呼びかけがなされた。また、次回の春季大会は慶應義塾大学で開催されるため、日吉キャンパスでの再会を呼びかける言葉で締めくくられた。

続いて、大阪大学の三藤博先生より、閉会の辞が述べられた。幹事長と大会担当幹事の谷本道昭先生を始めとする常任幹事会、事務局スタッフの皆さん、また、今回二つの会場に本を運ばな

ければならなかった賛助会員の方々、そして大会開催に尽力してくれた学生スタッフたちへの謝辞が述べられ、大きな拍手のうちに大会は終えられた。

2023年の春季大会も対面での開催ができることを心より願いつつ幹事長報告を終えたい。

総会

議長：森本淳生、書記：塩谷祐人、井口容子

支部報告および委員会報告は別掲、一般会務報告と協議事項を以下に記す。

一般会務

幹事長 谷口 亜沙子

1) 学会員数

9月9日現在、個人会員939名(正会員A:482名、正会員B:365名、学生会員:87名、名誉会員:5名)、賛助会員23社。2021年9月10日からの推移で言うと、個人会員で36名の減少。このうち正会員Aは20名減少、正会員Bは10名減少、学生会員は7名減少、名誉会員は1名増加。賛助会員は1社減少(前年は、個人会員で13名の減少)。このうち正会員Aは28名減少、正会員Bは6名増加、学生会員は9名増加、名誉会員は同数。賛助会員は同数。現時点での未入金は、正会員Aで31名、正会員Bで25名、学生会員11名。

2) 幹事会の活動

今年6月に新しい幹事会が発足し、2022年度春季大会総会直後に2022年度第1回幹事会を開催した。また、2021年度常任幹事会から2022年度常任幹事会への引き継ぎを兼ねた第1回常任幹事会は7月9日(土)に明治大学で行われた。この後、9月4日(日)に第2回常任幹事会を明治大学で、9月11日(日)Zoomで幹事会を開催した。

その他の具体的な活動は以下の通り。

- ① 7月12日(火)に日仏関連学会連絡協議会がオンラインにより開催され、仏文学会からは幹事長の谷口と塩塚秀一郎総務担当幹事が出席した。その際、日仏会館が実施する「日仏会館学術研究助成」および「日仏学者交換プログラム」の助成公募の案内があった。学会を通じての申請枠1件(学会推薦分)については、学会事務局に提出された応募書類(10月16日(日)締切)を渉外委員会で検討し推薦分1件を決定した。詳細については秋季大会時に渉外委員会の報告を参照。
- ② 秋季大会のプログラムや要旨集のチェックなどを行った。大会や支部大会のオンライン開催のために、Zoomビジネス(300人まで参加可)のライセンスを2022年9月1日から23年8月31日まで一年間契約延長した。
- ③ 2023年スタージュ第1回運営委員会が7月23日(土)にオンラインで開かれた。詳細はスタージュ報告を参照。
- ④ 7月31日付で「学会ニュース」第171号を学会ホームページに掲載した。
- ⑤ 9月1日付で『フランス語フランス文学研究』第121号をJ-Stage上で公開した。
- ⑥ 2022・2023年度用の名簿を改定し(今年度の「会則」と「運営規則」の改定については協議事項を参照)、大会プログラムと合わせて発送した。
- ⑦ 現在学会HPで使用しているWEBサイトのシステム(NetCommons2)終了に伴って、6月までにシステムの乗り換えが必要である。なるべく高額でないところを現在検討中である。

◆幹事会協議事項

- ① 第2回幹事会で、科研費の申請見合わせとLITTERAの休刊について協議され、承認がなされた。今年度の科研費（国際情報発信強化）は、金額を縮小し、新機軸を盛り込んで再申請をすることになっていた。一方で、科研費の獲得を前提とした学会運営を続けるべきかについては、目下「学会のあり方委員会」で審議中である。しかし、科研費が取れた場合にはLITTERAの刊行を続行し、あり方委員会の答申に関わらず、拡大路線を余儀なくされることになる。また、そのためのエネルギーが現在の学会にあるのかという点も危惧される。そこで、今年度に関しては、現在議論されている学会全体の在り方を今後5年間にもわたって先んじて決めかねないような再申請を見合わせる事が幹事会に提案され、審議ののち、承認された。また、それに伴い、LITTERAは現在準備中の8号までは刊行するが、9号についてはひとまず休刊とすることになった。本来であれば、本件は、総会での協議事項だが、科研費の締切が10月5日であったために、役員会と総会では事後報告となった。
- ② 分科会の改革案と査読制度の変更について、常任幹事会と編集委員長から提案がなされ、役員会の了承を経て、総会で協議することが了承された。

協議事項

① 学会誌の電子化に伴う運営規則の改正

学会誌の電子化に伴い、購読システムが終了したことにより、運営規則第10章「学会誌の購読」が全文削除された（2022年度の会員名簿に反映済み）。併せて、会則第3章第9条（会員の権利）の「会員は、本会主催の諸種の行事に参加できる。また、学会誌『フランス語フランス文学研究』、会報、会員名簿等の配布を受ける。」が「会員は、本会主催の諸種の行事に参加できる。学会誌『フランス語フランス文学研究』に論文の投稿ができる。学会ホームページへの執筆や投稿ができる。また、会報の電子配信や会員名簿等の配布を受ける。」に変更することが提案され、承認された。

② 2022年度人事案（修正）

前回、記入漏れ等のあった人事案が再承認された。承認箇所は以下の通り。

- ・広報委員会の副委員長に有馬麻理亜先生、内藤真奈先生。
- ・学会のあり方検討委員会の北海道・東北支部に阿部宏先生、関東支部に永井敦子先生。

③ 分科会改革案

分科会を活性化するための改革案が提出され、運用面での細部は今後慎重に決めてゆくとしても、大きな方針としては、以下の2点が承認された。

- ・分科会での口頭発表と学会誌への投稿論文にそれぞれ独立した意義を持たせる。
- ・口頭発表の聴取採点を行わず、学会誌論文の掲載可否は査読のみによって決める。

学会誌の投稿論文をどのように募集・審査するかは、今後、学会誌編集委員会と常任幹事会を主体として素案を作成し、改めて総会の協議にかける。改革案の要諦は概ね以下の通り。

1) 学会の活性化

- ・本改革は、学会の幹である分科会を活性化し、学会の求心力を向上させることを第一の目的としている。

2) 口頭発表の意義の最適化

- ・分科会から過度の緊張と萎縮の雰囲気を開き、活発な意見交換と多様な世代の知的交流が生まれる開かれた場としてゆく。

- ・論文投稿のために口頭発表を義務付けなくなるからといって、口頭で伝達する力を重んじる仏文学会の伝統を覆そうとするものではない。

- ・むしろ、現行の分科会が論文投稿のための「足切り」の場と化し、口頭発表の画一化が進んでゆくことを懸念し、口頭発表に口頭発表本来の意義や可能性を取り戻させることを意図している。

- ・分科会を、論文投稿権の確実な獲得を目指すための関門ではなく、自分の研究の面白さや要点をダイレクトに聴衆に伝え、より広く問題提起するための場として位置づけ直すことにより、発表者、聴衆の双方にとって、分科会の体験がより多くの知的刺激に満ちたものとなるようにしてゆく。

3) フィードバックや知的交流の活発化

- ・評点に響くことを畏れて、質疑応答で手を挙げにくいということがなくなる。

- ・審査の平等性を担保するために「25分（発表）+5分（質疑応答）」となっていた厳粛な時間管理に、柔軟性を持たせることができる。

- ・5分の質疑応答の時間をより長くとするなどの対応も可能となる。

4) 編集委員の負担の軽減

- ・4年間の任期×春・秋の2回の大会＝8回にわたる聴取義務によって、編集委員が疲弊してしまうことを避けられる。

- ・学会の中核メンバーである編集委員が自分の専門以外の発表も自由に聞きに行ける体制を用意しておくことは、長期的に見れば、学会の存続や活性化にもつながる重要な点だと考えられる。

- ・現行の二段階審査制度は、かつて口頭発表のみで論文掲載の可否までが決定されていた時代に、発表内容と投稿論文の甚だしい相違が見られた等のケースが問題視されたことによって始められたものである。しかし、口頭発表を透かすようにして、そこから予想する論文を仮に審査するという作業には、無理あるいは限界があり、また、そこで審査されようとしているものが実際には口頭発表ではないということによって、発表者にとっても、聴取者にとっても、照準を合わせにくい面があった。

- ・論文の精度や専門性はあくまでも査読でチェックするならば、編集委員の大会当日の精神的負担や全体の業務量を軽減することができ、また、それによって、論文の学術的な水準が低下するという事も生じない。

5) 発表者の多様化

- ・分科会が競争の場でなくなれば、中堅以上の研究者も発表を行いやすくなり、また、論文執筆の前段階にある修士課程の学生も参加しやすくなる。

- ・発表者が多様化すれば、聴衆の多様化も見込まれる。

6) 懸念点や課題

- ・学会員が移行期に混乱しないように配慮する。
- ・口頭発表が義務化されなくなっても、口頭での伝達力を鍛えることの重要性を軽視していないという姿勢を学会として明確に打ち出し、指導教員は積極的に口頭発表を行うよう学生に働きかける。

- ・学会誌への投稿論文数が増加した場合の方策を講じておく必要がある。

- ・本改革をめぐる論点、課題、解決策等は他にも数多くあるが、今後、編集委員会と常任幹事会の慎重な協議のうえで、具体的な素案を提出してゆく。

④ 2023年度秋季大会開催校（谷本道昭大会担当幹事）

九州大学における秋季大会開催が提案され、承認ののち、九州大学の高木信宏氏にご挨拶いただいた。

⑤ 2024年度春季大会開催校（谷本道昭大会担当幹事）

明治大学における春季大会開催が提案され、仮決定として承認された。

研究発表

語学/表象

司会：大久保朝憲（関西大学）

1. 再帰構文と非再帰構文におけるàとdeの機能

梶原久梨子（大阪大学大学院博士課程）

本発表は、再帰構文と、これに対応する非再帰構文に現れる前置詞à/deのはたらきを記述しようとする試みである。再帰構文では「事行と主体の結びつきが強い」という従来の見解に対して、本研究では、以下のような分析を提案している。心理的活動を表す再帰構文はàを伴うことが多く、そこでは事行pとp'が対立し、p'を意識しつつもpへ向かうという志向性があり、これが「主体との結びつき」を合理的に説明するものである。これに対して前置詞deは「無色透明」で、構文を構成する「部品」として機能する。

以上のことから、本発表は、今後の展開次第で、両前置詞の包括的な記述につながることを期待される野心的なところみであると言える。

司会：大辻都（京都芸術大学）

2. 病氣と俗信——流行中期における感染症の描写をめぐって

内藤真奈（国際基督教大学）

本発表は、文学における病の表象をめぐる大きな問題意識の一部をなすものであり、重要な部分であると受けとめている。

複数の作品から感染中期における俗信の事例を取り出す手つきは緻密さを伴い、評価できた。だが同時に、書かれた時代における事実の指摘が中心となっており、小説の分析としての意味づけがやや希薄であると感じた。

質問者からもあったように、歴史的事実を手記として書き留めたものか、あるいは書かれた対象が象徴的意味を担っているのかといったエクリチュールのレベルの差異を明確にし、小説ならではの感染症表象の「書かれ方」を前面に出すことで、論文としての問いがより浮き彫りにされるように思われる。

19世紀①

司会：塚島真実（神戸女学院大学）

1. 聴衆の前で読むこと——文学・芸術キャバレー「シャ・ノワール」におけるパフォーマンス

岡本夢子（日本学術振興会特別研究員PD）

「シャ・ノワール」に多角的なアプローチをしてきた発表者が、今回は朗読という切り口からその再評価を促した。文学における朗読の前史を踏まえ、「シャ・ノワール」が不特定多数の「聴衆のための朗読」という場を創出したことの意義が明快に提示された。さらに、膨大な資料を手際よくまとめ「シャ・ノワール」における朗読の状況を再構築し、その「文学場」としての特異性・重要性を新たな観点で明確化することに成功していたように思う。発表者自身のまとめや会場からのコメントにもあったように、今後は実際の朗読者の様子や朗読された作品を踏まえつつ、朗読される語りと書かれたテキストとの違いといった点に踏み込んだ研究が期待される。

司会：大出敦（慶應義塾大学）

2. マラルメの「われわれ」——〈白鳥〉のソネをきっかけとする考察

原大地（慶應義塾大学）

本発表は、マラルメが1885年に発表した「白鳥のソネ」と呼ばれる詩篇を分析したものである。発表者は、まずこのソネには現在では確認できないプレ・オリジナルがあったと推論し、その上で、このソネに現れる「われわれ」が、何か明確に特定できない虚字的な用法であることを指摘する。そこから、この「われわれ」の在り方を巡って、1885年のテキストと今では存在しないプレ・オリジナルとの間で、大きな断絶があることを明らかにしている。この分析は、マラルメの思想は一貫したものであると考えられてきたこれまでの傾向に対し、一種の断絶があるということ浮き彫りにした大胆な発表であった。

17世紀/19世紀②

司会：望月ゆか（武蔵大学）

1. 『プロヴァンシアル書簡』の作者は誰か？——パスカルと『プロヴァンシアル書簡』

野呂康（岡山大学）

『プロヴァンシアル書簡』をパスカル作とする文学史上自明の前提を問い直す試み。匿名の個別の手紙として公刊された書簡は合本時にルイ・ド・モンタルトという偽名が冠された。発表者は書簡をポール・ロワイヤルの共同作品と位置づけ、パスカルのみがその作者とされた経緯を、自身が身を隠す際に使用した仮名モンズとモンタルトとの関係を中心に、17～19世紀の伝承から検証した。その上で、書簡は、後半の手紙の題に含まれる「プロヴァンシアルへの手紙の作者」が行使する権威の論争の戦略として考察すべきだと結んだ。研究の端緒に相当する内容だが、本作品に関し、文芸理論の応用にとどまらない新たな考察も喚起しうる刺激的な問題提起であった。

司会：坂本千代（放送大学客員教授・神戸大学名誉教授）

2. スタール夫人における「歌詞なき歌」と「翻訳の精神」——『コリンヌまたはイタリア』を中心に

小沢史門（名古屋大学大学院博士課程）

『コリンヌ』の主人公はいかなる存在かという問いに対して、本発表では「神託の巫女」と「翻訳の精神の体現者」という答を用意し、それについて詳しく説明がなされた。まずは「歌詞なき歌」について、コリンヌが小説中でどのように「神の言葉」を聞かかという側面から、いくつもの例を引いて明快な説明がなされた。次に、小説中でなぜ、どのようにしてコリンヌが卓越した詩人とされているかが説明され、後年の論文「翻訳の精神」とこの小説の連続性が指摘された。コリンヌと翻訳についての部分をもう少し詳しく分析して説明する時間がなかったのが残念ではあったが、スタール夫人の音楽論と翻訳論に関する意欲的な発表であった。

20-21世紀①

司会：和田章男（大阪大学名誉教授）

1. ヴェントゥイユの《ソナタ》をめぐる考察の継承——スワンから語り手の「私」へ

関野さとみ（一橋大学大学院博士課程）

『失われた時を求めて』に登場する架空の音楽家ヴェントゥイユの「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」が演奏される3つの場面を取り上げ、楽器の編成やブルジョワのサロンと貴族のサロンという聴取の場の相違による音楽描写の変化・進展を、草稿資料調査およびテキストの緻密な分析によって明らかにするとともに、特に語り手の「私」の同ソナタの聴取において、すでに語られたスワンの聴取の仕方が継承されつつ音楽理解の深化が見られることには、芸術作品が繰り返し鑑賞されることによって自ら

の「後世」を生み出すという作者プルーレストの芸術観が反映していると論じる。文学と音楽の学際的研究として高く評価できる。

司会：上江洲律子（沖縄国際大学）

2. アンドレ・マルローとベルナル・グレットウイゼン——「歴史の不確実性」をめぐる

石川典子（慶應義塾大学非常勤講師）

「不確実性」« *aléatoire* »という概念がマルローの芸術論および遺作となった文学論に通底していることはしばしば指摘されている。しかし、本発表では、これまであまり論じられることがなかったその概念の端緒が組上に載せられ、1930年代から彼と親交があったドイツ出身の哲学者ベルナル・グレットウイゼンのもたらした影響についての考察が行われた。そして、両者の交流が始まった時代にグレットウイゼンが『新フランス評論』に発表した2つの書評「現代哲学の展望」（1934年）と「歴史批判哲学」（1939年）を丹念に読み解きながら両者の人間観と歴史観の関連を見出し、「歴史の不確実性」へと収斂していく過程をたどる論考には説得力があった。

20-21世紀②

司会：中山慎太郎（跡見学園女子大学）

1. もう一つの啓蒙の詩学、もう一つの詩の現代性——電気を語るボンジュ

太田晋介（大阪大学招へい研究員）

電力会社の役員の求めに応じて書かれたフランシス・ボンジュの特異なテキスト、「電気についてのテキスト」を、電気の歴史について語られる際の「時間」、「時代」概念に注目しながら分析、考察することで、ボンジュ独自の進化論、人間論、さらには現代における啓蒙の詩学を明らかにしようとする意欲的な発表であった。発表者によると、「電気」はボンジュが詩の対象とする様々なオブジェと一線を画す例外的なオブジェということであるが、実際にどのように異なるのか。ボンジュ詩学の新たな側面が提示されていただけに、詩作品との比較といった具体的な提示が欲しかったが、時間の制約上難しかったのであろう。今後の展開に期待したい。

司会：鈴木雅雄（早稲田大学）

2. スペイン内戦期のルネ・シャール——「外では夜が支配されている」を中心に

白石幸作（東京大学大学院博士課程）

ルネ・シャールの詩集のなかでは比較的扱われることの少ない『外では夜が支配されている』を取り上げ、詩集冒頭の二編について詳細な解釈を試みる発表。特に表題作「外では夜が支配されている」について、頻出する曖昧な三人称の所有形容詞を、既存の解釈に抗し、謎めいた女性的存在を指すものとして読み解く作業は、テキストの潜在的な可能性を引き出す試みとして評価できる。逐語的に解釈していくような方法をどう評価するかは意見が分かれるかもしれないが、誠実で貴重な仕事であろう。ただ、資料にやや不正確な部分があったのは残念にも思った。こうした作業の積み重ねの末に、自然と新しいシャール像が生み出されることを期待したい。

20-21世紀③

司会：村石麻子（福岡大学）

1. まなざしと主体性——『ナタリー・グランジェ』におけるデュラスと女性たちをめぐる

馬場智也（京都大学大学院博士課程）

所有と支配のパワーゲームから解放された新しいまなざしの哲学を、デュラス映画の作品分析を通じて提示する画期的な発表である。デュラス的な視線を、対象を客体化する権力と近代的ロゴスへの反抗としての「見られた」から「見返す」闘争の眼差しではなく、空間との一体化・融合による「見合う」経験を共有する等価的な眼差しであるとし、この「うつろな」視線にこそレゾン・デートルを必要としない女性特有の存在形式が見て取れるとの指摘は興味深い。その一方で、男性にも担いうる誰のものでもない視線であると再定義しており、デュラス論の常套句« *écriture féminine* »に回収せず、ジェンダー論を超えた多様な解釈を示唆している点でも、意義深い試みと言える。

司会：田母神顯二郎（明治大学）

2. フランス現代詩におけるソネと自由詩——ギュヴィックの短詩をめぐる

森田俊吾（東京大学）

短詩型自由詩で知られるギュヴィックは、1954年に『31のソネ』を刊行し定型詩復権運動のきっかけを作ったが、その後は定型詩を否定し放棄したものと一般に考えられてきた。これに対し森田氏は、定量分析も交えた考察により、後期の詩では脚韻などの顕在的特徴は後退するものの、六音節詩句の反復が多用されるなど定型詩の音律的特徴を柔軟に取り込む姿勢が見られること、その一方自在な破調の導入により自由詩の枠組も保たれていることを実証しつつ、「答えのない問い」に向かって詩を開いていく後期ギュヴィックの新たな詩法を浮き彫りにしてみせた。発表後もギュヴィック詩における「空白」との関連等をめぐって、活発な質疑応答が交わされた。

支部

北海道・東北

辻野 稔哉

① 8月8日・18日に支部運営委員会をオンラインで開催した。11月12日に秋田大学で2022年度の支部大会を行う予定（対面とZoomによるハイブリッド方式）。

② 9月11日現在の所属会員数は以下のとおり。正会員A33名、正会員B15名、学生2名、支部のみ6名、合計56名。

関東

岩野 卓司

① 2022年度関東支部大会は2023年3月4日（土）、明治学院大学を開校校としてオンラインで開催の予定。大会実行委員長は杉本圭子氏、開催校代表幹事は大池惣太郎氏。「研究発表者募集のお知らせ」は8月22日付で学会サイトに公開された。受付は8月29日（月）から11月11日（金）までとなる。

② 『関東支部論集』第31号発刊に向けて作業中。論文8本、要旨1本のほか、シンポジウム「庭を歩く、文学を歩く」の発表3本および全体討論を掲載予定。

③ 4月23日（土）に第1回支部幹事会が開催され、2021年度支部大会決算報告等がおこなわれた。次回支部幹事会は12月3日（土）の予定。

④ 9月23日（金）現在、関東支部に所属する会員は522名（正会員A254名、正会員B203名、学生会員5名、名誉会員4名、準会員2名）。

中部

重見 晋也

① 2022年度第2回幹事会を10月1日にオンラインにて開催した。

- ② 2022 年度支部大会を 12 月 3 日（土）にオンラインにて開催。10 本の研究発表を予定している。
- ③ 『中部支部研究論集』第 46 号を年度内に刊行の予定である。
- ④ 2022 年 9 月 9 日現在、中部支部の所属会員数は 91 名（うち正会員 A52 名、正会員 B27 名、学生会員 4 名、準会員 8 名）。

関西

永盛 克也

- ① 2022 年 9 月 9 日現在、関西支部会員数は 206 名（正会員 A101 名、正会員 B84 名、学生会員 20 名、名誉会員 1 名）。
- ② 第 1 回実行委員会を、7 月 3 日（土）に Zoom を用いたオンラインにて開催した。新旧実行委員の引継ぎ、支部会誌新編集委員の承認、本年度活動スケジュールの確定、支部選出各種委員の承認、および予算執行等について協議した。また、コロナ対策として、実行委員会の開催や各種作業（プログラムの発送、実行委員選挙の予備投票）、大会（分科会、合同委員会、編集委員会、総会）をどのように行うか協議した。
- ③ 第 2 回実行委員会を 9 月 17 日（土）に Zoom にて開催した。支部大会は原則、対面（発表者の一部はオンラインでの発表）で開催することになった。大会発表者の決定、司会者の調整、プログラム作成等の準備をした。実行委員選挙の予備投票・第二次投票をウェブ選挙システム（i-vote）で行うことを決定した。プログラムおよび要旨集（パスワードつき）は支部会 HP にアップした上で、リンク先を支部会員にメールで送付することになった。また、支部大会までに会計監査を行った上で、実行委員会における会計報告は、メールで審議することになった。
- ④ 支部大会は関西大学にて 11 月 26 日（土）に開催予定。

中国・四国

宮川 朗子

- ① 2022 年度の中国・四国支部大会は、水産大学の主催で、12 月 10 日（土）に開催を予定している。ハイフレックスでの開催を予定しているため、Zoom のアカウントを学会から借りる予定。
- ② 2022 年 9 月 7 日の時点で、中国・四国支部会員は 40 名（正会員 A20 名、正会員 B10 名、学生会員 1 名、支部のみ会員 9 名）となっている。

九州

真下 弘子

- ① 2022 年度第 1 回運営委員会を 7 月 24 日（日）にオンライン（Webex）で開催した。
- ② 2022 年度第 2 回運営委員会を 10 月 10 日（月）にオンライン（Webex）で開催した。
- ③ 第 69 回九州フランス文学会・日本フランス語フランス文学会九州支部大会を、2022 年 12 月 10 日（土）に長崎大学で対面にて開催する予定である。（新型コロナウイルスの感染状況によってはオンライン形式となる可能性あり。）
- ④ 同大会にあわせて、『フランス文学論集』第 57 号を会員に配布予定である。（当日配布または後日郵送。）
- ⑤ 九州支部所属会員数は、9 月 10 日時点で 79 名（正会員 A32 名、正会員 B26 名、支部のみ会員 21 名）、賛助会員 3 社である。

委員会

学会誌編集委員会

鈴木 雅生

- ① 学会誌 121 号を 9 月 1 日付で J-Stage で公開した。
- ② 立教大学での春季大会では 17 件の研究発表を聴取、その評価にもとづき 11 名に論文執筆を許可、査読を経て 10 月 22 日の第 2 回編集委員会で掲載論文 5 本を決定した。これらは学会誌 122 号として来年 3 月末に公開予定。
- ③ LITTERA 第 8 号を 2023 年 3 月刊行に向けて編集集中である。

- ④ 今年度の科研費（国際情報発信強化）については、幹事会で協議し、申請を見合わせることにした。
- ⑤ 次期の委員長および副委員長が互選により選出され、承認された。

渉外委員会

熊谷 謙介

- ① 2022 年 10 月 22 日（土）に 2022 年度秋季大会（大阪大学）で開催予定の、エリック・ル・カルヴェズ氏の招待講演（対面を予定）に対する学会の後援申請があり、委員会でメール審議をした結果、後援を承認した。
- ② 2023 年度日仏会館学術研究助成、2023 年度日仏学者交換プログラム学会推薦企画について学会 HP で公募し、10 月 16 日（日）の締め切りを待って、渉外委員会で検討して案を出し、総会での承認を求める。日仏会館学術研究助成については 1 件の応募があり、日仏学者交換プログラムについては応募がなかった。前者について、委員会でメール審議をした結果、研究代表者 Vincent Brancourt 氏と 5 名の日仏研究者による研究計画「レトリックとテロル：ジロドゥ／サルトル／ブランショ」を、学会推薦に値すると判断し、役員会・総会で報告・承認を求めることとした。（上記②が本総会において承認された。）

語学教育委員会

上杉 未央

- ① 2022 年 7 月 23 日（土）に第 1 回フランス語教育国内スタージュ運営委員会が Zoom を用いた遠隔会議形式で開催。関東支部所属の委員 3 名が参加。職務分掌、実施の概要、今後の運営の方向性などを協議した。
- ② 8 月 25 日（木）に、運営委員のうち、教務委員、運営委員長、副委員長、メイン講師の計 5 名で Zoom 会議を行い、開催方式や内容、招へい講師について、細部を検討した。
- ③ 9 月 25 日に第 2 回運営委員会を開催。募集要項、開催方式などについて協議した。
- ④ スタジエール募集に際して、各会員には、支部大会やメーリングリスト、ロコミなどを通じて周知活動へのご協力を賜りたい。

研究情報委員会

宮本 直規

- ① 5 月の委員会で審議を行い、2023 年 3 月刊行予定となる cahier31 号の書評、執筆者を選定した。
- ② cahier30 号を 9 月 24 日付で刊行した。

広報委員会

八幡 恵一

- ① 「学会ニュース」第 171 号（2022 年 7 月 31 日付、8 月 2 日に改訂版）を発行した。
- ② 学会 HP 「学会員からの情報」欄の更新作業を輪番で担当している。

学会のあり方検討委員会

星埜 守之

オンライン及びメーリングリストで協議の上、以下の答申を総会に提言した：

2022 年 10 月 23 日付第 1 次答申

〔I. 答申の背景〕

日本フランス語フランス文学会 2022 年度春季大会総会にて、学会のあり方検討委員会に以下の事項について諮問があった。以下、学会ニュース 171 号より引用する：

科研費「研究成果公開促進費（国際情報発信強化）」（2022-2026 年度）への応募が不採択に終わったことを受けて、今後の学会運営のあり方について協議した。議論の要点は、今後も科研費による助成金を前提とする学会運営を続けるか、それとも、会員数減

少に見合った活動縮小に舵を切るか、という点にあった。これは今後の学会運営を大きく左右する問題であるため、拙速に結論を出すべきではない。そこで、学会運営における科研費の位置づけや、安定した学会運営のための方策について、学会のあり方検討委員会に諮問することが提案され、承認された。

今回の諮問は学会の今後の運営についての中長期的な方向性にかかわるものであるが、他方で、塩塚前幹事長からは、「科研費を前提とするかどうか」に関する方向性の設定は、2023年度予算案の立案の前提となるため、当該予算案立案以前に答申を提出することが要請されている。ところで、学会のあり方検討委員会への諮問は規程上、総会からの諮問と位置付けられている。従って、諮問のこの部分については、2023年度予算案が付議される2023年度春季大会総会ではなく、2022年度秋季大会における総会にて答申することが合理的であると解釈されるため、本委員会としては、本年秋季大会総会にて少なくとも当該部分についての答申を行うこととし、委員全員の賛同を得た。なお、これに付随する様々な案件に関しては中長期的な展望も含めて議論すべき事項が多く、これらについては2023年度春季大会総会にて第二次答申として提言する予定である。

【II. 第一次答申】

以上の背景から、本委員会は①科研費による助成金を前提とする学会運営を続けるか②会員数減少に見合った活動縮小に舵を切るか、に絞って議論をおこなった（なお、②については、「科研費による助成金を前提としない運営」を含意するものと理解する）。その結果、以下の方向性が妥当であろうとの結論に達した：

今後の学会運営については、会員の減少なども踏まえ、科研費による助成金を前提とせず、活動予算の縮小の方向に舵をきるべきである。

【III. 答申の理由】

本答申の理由はおもに以下のような点に存する：

- 1) 科学研究費補助金の獲得そのものが難しい。2017年から2021年の活動に対して助成された補助金の種目は「研究成果公開促進費（国際情報発信強化）」であり、これは本来 *LITTERA* 刊行等の新規事業のインフラ整備のための助成金という趣旨と考えられるため、今後の科研費獲得の見通しとしては、従来の恒常的活動の強化等を根拠に申請しても補助金が下りる可能性は低く、また、助成金を獲得するために新規活動を打ち上げることは、現在の学会の状況においては現実性に乏しい。今後、科研費の種目によっては申請することも検討され得るが、助成金の獲得は不確実であり、これを前提とすることはできない。
- 2) 科研費の申請業務そのものが編集委員会等、申請に関わる学会内組織や学会員にかなりの負担となっており、学会活動への参加に対するモチベーションを損なうことも懸念される。
- 3) 本委員会からの2014年、2019年の答申において、学会員の減少ともなう運営の方向性の再考がすでに提言されており、また、直近の2019年の答申でも科研費による助成を前提としない運営へのシフトが示唆されていたと考えられる。

以上が本委員会の第一次答申である。2020年以降、コロナ禍により短期的に解決すべき課題が山積し、2019年答申ですでに示されていた諸提言についての取り組みが遅れていたことは否めない。致し方ないことではあるが、今回の第一次答申、および第二次答申をもって、いわば仕切り直しすることができれば幸甚である。

スタージュ

飯田 賢徳

- ① 2022年7月23日（土）に、次回2023年3月開催のスタージュの運営委員会が発足し、同日、第1回フランス語教育国内スタージュ運営委員会が開催された。依然として新型コロナウイルス

感染症の問題があることから、スタージュの実施形態（対面開催かそれともオンライン開催か）等に関して議論を重ねた。第2回運営委員会（9月25日開催）で、実施形態を決定した。

② スタージュ運営委員会新メンバーの分掌・引継ぎともにつがなくな行われた。

③ 9月25日（日）に第2回スタージュ運営委員会を開催し、スタージュ募集要項（仮）が確定した。前2022年スタージュのプログラムにもとづいて、教務担当者メンバー（運営委員会メンバー）およびスタージュのメイン講師が中心となって新プログラムの詳細を作成中である。

④ 2022年8月25日に、第1回教務会議が開かれ、飯田も出席し、スタージュの実施形態の可能性やプログラム内容について議論した。この他にインターネット上での会議を重ねて新プログラムについて話し合っている。

⑤ フランスからの招聘講師に対する謝金の金額の根拠について質問が出ている。金額の根拠については、目下調査中であるが、不明な場合も想定される。この点を踏まえて、第2回スタージュ運営委員会で、金額根拠の明言化を協議した。

⑥ 国内スタージュ参加者のうち3名が、2022年8月開催のブザンソン夏季研修に参加した。夏季研修は、無事に現地で実施された。夏季研修報告書を現在編集集中である。報告書は、10月中旬に学会HPにて公開予定である。

⑦ 次回第3回運営委員会は、2023年1月6日（金）・7日（土）・8日（日）のいずれかに開催予定である。

以上

～お知らせ～

2024年度学会奨励賞論文募集

本会は、若い会員の研究を奨励し、表彰するために学会奨励賞を設けています。奮ってご応募ください。

受賞人数：2名以内

賞金：3万円

応募条件：業績公刊時40歳未満の本会会員

対象業績：2021年4月1日より2023年3月31日までの間に印刷発表された、フランス文学・フランス語学・フランス語教育等に関する優れた業績。

選考方法：選考委員会が審査委員を委嘱し、予備審査結果に基づいて、受賞者を決定します。

応募方法：各支部より選考委員会に推薦します。自薦・他薦は問いません。履歴書、業績書および推薦対象業績のPDFを、支部事務局に提出ください。

推薦締切り：2023年4月30日（日）事務局必着（PDFをメール送付）

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では *cahier* および学会HPにおいて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定いたしますので、必ずしもご推薦いただいた本のすべてが書評されるわけではありません。

◇ 目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい、学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領

学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月日を明記の上、紹介文(200字程度)を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇ 締切り：毎年3月・9月末日

◇ 宛先：日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までお送りください(メール可：cahier_sjllf@yahoo.co.jp)。

2023年度春季大会のご案内

2023年度春季大会は、慶應義塾大学・日吉キャンパス(神奈川県横浜市)において、5月27日(土)、28日(日)に開催されます。大会開催形態(オンステージ、オンライン)につきましては、現在検討中です。

研究発表、ワークショップ開催、研究会開催をご希望の方は下記の募集要項をよくお読みの上、学会ホームページのwebフォームよりお申し込みください。

研究発表者募集

申込方法：学会ホームページのwebフォームからお申し込みください。研究発表は未発表の内容に限ります。

・日本語で発表の場合は日本語の題目、フランス語で発表の場合はフランス語の題目にしてください。題目変更は発表要旨締切日まで受け付けます。副題をつける場合は、本題と副題の間にティレ(—)を入れてください。

・発表する分科会を選択してください。分科会は次の九つです。語学/中世/16世紀/17世紀/18世紀/19世紀/20・21世紀/思想/表象。

・申込書記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。

研究発表会日時：2023年5月27日(土) 時間・場所は大会案内でお知らせします。

発表形式：世紀・ジャンル別の分科会形式で、発表1件につき30分(発表25分+質疑応答5分)。会場での参考資料配布可(必要な方は当日持参のこと)。

発表資格：本会会員であり、大会2週間前までに当該年度の会費を納入済みであること。会員によるグループでの応募もできます。現在会員でない方は、先に登録申請をお願いします。

締切り：2023年2月21日(火)

発表要旨：大会参加者に配布する発表要旨の原稿をwebフォームからのアップロードでご提出いただきます。要旨執筆要領は申込後自動送信いたします。

・要旨は1200字以内です。

・要旨提出締切りは3月14日(火)です。

◇ 2023年度秋季大会の研究発表については、春のお知らせで募集、6月上旬締切り予定です。

ワークショップ企画募集

2023年度春季大会にて開催するワークショップを募集します。ワークショップの企画書(書式自由、A4用紙で1枚程度、企画責任者の連絡先と、できればパネリストの人数と氏名を記載)をwebフォームからご登録の上、お申し込みください。応募多数の場合は、大会実行委員会の審査により決定いたします。

日時：2023年5月28日(日) 時間・場所は大会案内でお知らせします。

テーマ：多くの会員が高い関心をもちうるもの

パネリスト：3~4人

時間：120分

締切り：2023年2月21日(火)

研究会募集

開催校のご厚意により、大会第1日目に研究会開催の時間を設けます。開催をご希望の研究会は、下記によりお申し込みください。

日時：2023年5月27日(土) 10時~12時

申込方法：書式自由、①研究会名②代表者氏名③連絡担当者氏名④連絡先(住所、電話、FAX、メール等)⑤参加者数をwebフォームからご登録の上、お申し込みください。

締切り：2023年2月21日(火)

なお、研究会の数や規模によっては、会場の関係でお断りすることもあり得ます。また会場は有料の場合もありますので、ご承知おきください。

賛助会員(2022年12月1日現在)

朝日出版社、アシェット・ジャポン、アティーナ・プレス、E-Studio、旺文社(外国語辞書グループ)、京都大学学術出版会、グロリアツアーズ、三修社、三省堂(辞書出版部)、小学館(外国語編集)、水声社、駿河台出版社、早美出版社、大修館書店(編集第二部)、DTP出版、日仏文化協会、白水社、ひつじ書房、(公財)フランス語教育振興協会(APEF)、フランス国際放送TV5MONDE、フランス図書(アイウエオ順)

事務局案内

開室時間 月水金 10時~16時(昼休み12時半~13時半)

幹事長来室日 2023年3月までは原則水曜日

冬季閉室 12月28日~1月5日

・ご連絡はメールでお願いいたします。